





泊船集卷之五



芭蕉菴拾遺稿

維陽 風國撰次

久々八郎

し

島田塚本氏に譲る

馬のハシの太井川

歸田乃常

宿
可
一
卷
名
乃
其
也

不
二

一尾根ハ

西
軍
子
居
了

しや田乃あいのぬり
里志和

旅人上京者必
秘靈月

自了兩乃倅

宗祇の

此の文字を世の中と

後
田
飛
子
ハ
一
ノ
ミ
ナ
リ
ト
ス

乃あやほりちまづ
なまの民

雨

深川 三橋 甲 乙

初雪や掛るる雪の上

初雪やしらぬる雪の底

大佛は雪にまみれぬ

初雪やいかに大佛の顔

初雪や雪の僧の足

初雪や幸に蒼くみある

深川 八寶 又ハ今雪

米の雪は雪の底

深川 雪の

酒飲ハるる雪の

對友人

君の雪は雪の底

免し角もな〜〜や雪乃

枯尾を

ひ〜ろに〜な鳥も雪乃

あ〜あ哉

熱田御造宮

こまろ〜〜鐘も清〜雪のそ

あ〜〜付し雪乃〜紙子な

雪〜〜〜〜〜
信乃な

雪〜雪〜〜師も乃

各月乃

け白〜尾列〜中あ〜あ

あ〜あ〜〜〜

いさ〜〜〜雪乃〜こ〜乃

あ〜あ〜

山中〜子共あ〜あ

雪乃中〜免乃皮の髪〜

小町 雪乃

雪乃さ〜雪乃〜ぬ目〜雪乃

信濃路のさうら

雪もや穂屋の薄乃

川流

夜着ハ重ハ天ノ雪

蛇向ハ延室乃比乃吟
あゝあゝ

大が

おろろ乃身ハ外斜
似るる

道乃記ハ蛇向

ありうま後ニ蛇向乃えま

とぬま蛇向

巻頭ハ一ハ五哥仙有久乃

目とえま

風ハ頼ハまじ痛サハハ乃頼

六く——よ 名吹せの。杉屋

三列——管弦——

京あまう 杉木——
冬 僅白

三ノ耕田新田

あ——。包ひやはら 海りも

冬 籠

夕く 女もも——つるん
あ——

き—— 隠さるる
か—— せし

乙 祝 梅さん乃冬いもり

金屏よ 妻乃婦さんや冬になり

千川一

おほくは吹くさうとてや
あはれ龍り

贈酒堂

詞書中へききん

難波津や田のぬい
夕々し

深川冬夜の聲

櫓乃声波をいりし
こ和り比乃由し

落葉

あまのりるあまのりる

神の落葉

あはれ権現

宮へ我名をいし
落葉川

明照寺

百年乃氣をいし
落葉川

おの

まのゝ染やそめ〜た〜

東護

あひま後酢煮る 袴つぎ

振替れ雁あ〜れ 東護

御金講

御金講や油乃やうま酒を味

大根

お梅通子 小坊主乃るや

埋火

大根

埋火や碑の八客乃影

追善下

埋中もき遊や泪乃者なり

あゝ他

あゝ他や白な障乃も

其もほひ柳も白

字々葉

字々葉や粉糝乃

大津下

三人乃山も角乃木乃葉なり

あゝ他や白な障乃も

雨乃竹抄乃

口切

支梁亭

口切の境乃庭々々々々

炸ひまやた友あひあふ乃霜

あれ

いのもん——おきや電の槽乃々

難ひな琵琶あ〜軒あれ々々

あ〜

あ〜何ともあき乃ハる

あ〜

あ〜

熱田

あそひまぬ熱田乃々々々

西行の歌あ〜乃々々々

山家集乃題々々々々

一露しこはまぬる来乃々々々

山崎

山崎の園をめぐりて

山崎の園をめぐりて

山崎

山崎の園をめぐりて

山崎

山崎の園をめぐりて

山崎

山崎の園をめぐりて

山崎

山崎の園をめぐりて

山崎

山崎の園をめぐりて

山崎

山崎の園をめぐりて

山崎

張

婦人

人乃菴主也

實乃菴

子

やまもり

やうするの霜

霜の後の雪

花之五れは方即ち一ほ其葉は種

病中

藥乃七々々々霜乃まゝ

探玄

陽川亭

香もさる。梅もある。軒より
赤もある。も入さる。梅も

赤らしてむ入さくを梅橘

大田菴乃ま道圖士芳
 名をうけるはまゝのまゝ
 まゝのまゝのまゝのまゝ
 清かりその日をまゝのまゝ
 一更乃霜と降ぬ今日ハ晴
 ひめめめめめめめめめめ
 まゝのまゝ

其ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

鳳まゝ

おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 深川の旧地
 うゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

都ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

シ

シ

長嘯の聲もあつてのやうな
納めたるも——はまし錦もあ

年——

おのゝこゝろ——
掃
おのゝこゝろ——

おのゝこゝろ——
し
おのゝこゝろ——

おのゝこゝろ——

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝ

あゝ

鴨の足

毛羽年一ふとく鴨の足

面白ー雪もあんな冬のも

芥子焼やまは輪入田井の

冬うれの碓氷の冬アムサカ

とれ

月白な師走ハ子路の夜さうな

うれ鼻師走う海乃鳩

何さこ乃師走の師走

こて登壇うさう

あつあつハの師走

分別ハ底あな鼻走ーのれ

遠人よあつゝおとあつゝ
月雪も乃ささちうのれ
し朝入止まへまじさむ
魚いへんいへんいへん
蛇入もいへんあまの
ゆゑもやし勝乃れ
くまのちし線あまの
世もあまのまれと
いへん

世もあまのまれと
いへん
有明し
解の

病中乃吟

猿もあまのまれと
いへん
死あまのまれと
いへん

郭白

あそふも誰より——
こゝ路通、力力ぬり、あ
めりといふ書もぬ
ねる、ね
うそあゝハ杖ふねる
いふ馬も

泊船集卷之六

柳 石 乃 乃 乃 乃 乃

高名九條 幸平 色絵いり

て 追 加 と せ ぬ 事 あり

卷之四

五

洛風園撰

一とやふく度くはなすなり芭蕉

烟之頭巾呼多若菜其角

芳華つゝ敷和やろきん儀
玄素

美事のまや野坡

踏ふ雪の勤りハエヤスル哉 惟然

物より方より賢の若菜也 風を

若菜ついでハももゆる白田
城入

山崎

山崎

橋

おめいのさふあそぬの橋い 惟也

宮の守はつつなの橋の 林和

ふいまいあいまいあいのの橋の 西

くの月のおめいのるるのの橋の 凡

橋のへのるるのの橋の 乃有

あちないぬすものぬいののあいのの橋の 金羅

山崎

くの月のおめいのるるのの橋の 其角

宮のハの刀のるるのの橋の 其角

宮のハの刀のるるのの橋の 其角

宮のハの刀のるるのの橋の 其角

宮のハの刀のるるのの橋の 其角

宮のハの刀のるるのの橋の 其角

卷之五

ス
リ

ふんほりと目入耳ふたる柳の
野坡

可吟

之聞

子

世に乃知と里人のり

名
子

あの校子さうな奴や

山風雪

五

舒水

杉風

長
子
七

五
百廿八

猿雖

文子

張人

古
智月

風

ちりこもるもや繫着乃紙乃間 ちま

維

ねりやひよる維子乃あしり ^{イカ} 万平

さ乃まよるあしり ^{イカ} 圓解

ろひれい ^{イカ} 万平

とめい ^{イカ} 万平

さしり ^{イカ} 万平

おちろ月

才魯甲のあしり

さしり

おちろ月 ^{イカ} 万平

圓城

おちろ月 ^{イカ} 万平

才魯甲

師乃替いつらん ^{イカ} 万平

奥列二本

惟氏

ちゅるちゅる赤くや南風 片中 好風

まおおハ入楓乃ち 片中 嵐青

いさや白きあもすのち 片中 おろ

山姫およ 片中 白きあ

い乃乃 片中 香乃乃

都々書 片中 乃乃

うゑ

奥の列 今れきし何しを

芭蕉

早一苗よもつゝいり思ふ

日あけ

郭——云

郭ふたしちん様より 正秀

飛んぬまの都乃子知ん 孝

後雪なるやふち乃子知ん 素

後雪なるやふち乃子知ん 素

子知ん山田乃あるふちのけし 浪化

はな

船さるるくく程なる雪ふ 凡

あし声ハおのの餌食、郭一云 有

あけのぼる月を 朱枝

灌佛一

灌佛や 帆行

る

うぐいし 樽入む 浪化
やうと 鳴る ときん

白鷺乃人 慎女

作乃書懷

おろし 桑名 浪化
川 鳴る 正東
青路 田んぼ

洋行

出

~~~~~

~~~~~  
路徒

國々名々~~~~牡丹の~~~~
風

~~~~~

~~~~~  
曲風

~~~~~  
山

~~~~~

陣~~~~
夢

~~~~~

冷酒~~~~  
有

更

小坊~~~~  
眠山

子~~~~  
白雪

蝶~~~~  
野波

加

付



西郷公人

大

さしつかへなくいふべきこと

本町家

本部

さしつかへなくいふべきこと

猪乃目

高橋

卯乃目

曾良

五目

さしつかへなくいふべきこと

八幡

さしつかへなくいふべきこと

さしつかへなくいふべきこと

さしつかへなくいふべきこと



淡月

悲

ちまよ 橘 ふまふ 夏畑

懺

ねちちて鬼乃はくちまよが 為有

目限も来ぬとてまふ乃ちまよ ト柄

捕や 重さきけ 埒の陰 ろれ

ふ 柳もふも乃きやふまよ 如行

ひ川そまといふこのあふの 可曉

いろの作とちり 梟麦の跡 玄栗

く

夕まよとてまふや竹の跡 玄栗

あつて

石もまよ 眼もひるあつてな 玄栗

雞乃砂よまよとてあつてな 風

ゆふ

ふ







そ—おゆ—あゆ—  
あゆ—

水九  
游刀

し—

し—やま—はあ—のあ  
素堂

白ト

作



秋

かきまき

ぬきぬき人とおく ちりちり 芭蕉

秋のや鷹乃ち毛 浪化

おもしろさうやう 長井 魯町

あまうけ

秋凡や羽織もまゝ 小脇指 小枝

釣さうやう 秋の凡 正木乃

うきうき 龍もつる 金剛山も 金剛山 金剛山

初秋乃らむ

三の月の秋も 風の上 風必



七

秋もまじりたるのちのち

秋の鐘

まじりたるや船よハあつた

美奈乃烟

風玉

蜻蛉

蜻蛉

蜻蛉

蜻蛉

虫

雁

雁

雁

雁

萩

白くみえたる燈籠

燈籠

高白

ふれ川よまゐる

おのゝこ

自性

け角より倒れし水よ

水

野紅

蜻蛉やりもまじりたる

蜻蛉

頭水

蜻蛉乃体よりわたり

蜻蛉

思信

黒雲ハ本林し晴る

黒雲

車推

半輪の種もいり

半輪

湖名

蜻蛉乃もまじりたる

蜻蛉

可成

蜻蛉や船よ

蜻蛉

十文

こちよある雲の穂の穂あり

雲

重行



水中魚住

卷之六

如冰

ぬはく

也

文之聖  
也

Handwritten signature or scribble.

ハリ

鳥を以て馬や人をさす秋のやう

長子

肥後

蠅の秋泥足

三

安藝竹原

[illegible]

櫓の尾におそひ

新々々々々々々々々々

風  
土

5723

庚子

中島子落ついでせうへつる

露川

[illegible]

惟此

何よりさハまゝつゝ也  
の413

牛氏

粟乃穂やう

山中富山

開  
城  
す

自  
於



霧

ほろろと霧のさへる霧の  
舟 舟角  
つるつるのつるつるの霧の  
舟 舟中魚住  
麻

さるる

女子清く一葉をさるる霧の  
ハ朝よさやハもさるる霧の  
野

月

昔遠流の天有はる

そるるも羽運よのしもじの月  
芭蕉

宿月さるるやさるる路の草  
惟

川さるる留よあつる月  
杉風

名月や故郷さるる馬乃面  
行

くの月ほろろと叫むるわ  
秋色

雨下

月



こたのり

こたのりおひあつた月つきの光ひかり 出芽でが

ちり  
空そらや大度おほしるるるる  
ちり  
おひあつた

月つき夜よや空そらや大度おほしるるるる 風かぜ玉たま

月つき夜よや空そらや大度おほしるるるる ち月つき

かこりいあつた

空そら佛ほとけきこかこりいあつた ち月つきの光ひかり 千山せんざん

名な月つきやねるるるる ち月つきの光ひかり 千山せんざん

酒田さかたおひ

ちりいあつた 月つきの光ひかり 千山せんざん

島落しまおちくく仙臺せんたいのち

はりい

名な月つきやねるるるる 月つきの光ひかり 千山せんざん

ちりい

島落しまおちくく仙臺せんたいのち

月つきの光ひかり 千山せんざん



二

天

馬のあや 大さくら いく けん 芭蕉

第巻の續

田力好

打ぬ！ 雁鳴て  
 雁鳴て 月よめ事のつちを  
 土芽

風車や時をくぐりて  
海より一糸の春のよ  
うにふくらむ花はな  
あつちの空はわが  
ほのかの空をまわす

おき  
え  
ちま  
野坡  
諷行



酒をうんごき乃水か 野明  
鹿乃月よりか 久々田 著其

金剛

志つゝさハ赤雲下層モ  
水江やあつゝ時ぬる  
計中篇定

雪

九  
力  
に  
ま  
ん  
ぢ  
に  
ぬ  
雪  
乃  
源  
也  
志  
事

い  
ろ  
も  
く  
や  
婦  
り  
つ  
む  
山  
嶺  
の  
雪  
乃  
志  
事

くせものやとんとなひ  
雪の雲  
沙朗  
奥があらまへ

紫いしんふりや雪のうら  
さよ  
 花は  
 風は  
 沙明  
 浪化  
京  
 芦角



きふ あふ

あふの ころの

きふのれや路のり

あふの枝

生枝

きふのれや路のり

風土

小坊のり

あふの

あふの

丹は路

あふの

あふの

あふの

あふの

あふの

あふの

あふの

ハ

霜

霜

霜

あふの

あふの

あふの

あふの

あふの

あふの

あふの

あふの

あふの

あふの



題云

瀧幅や氷乃中れいりも 其角  
茶乃もろくちりも 孤水  
林野も目も 約  
橋くや暮るる 孤屋  
冬争れ都ちりや 孤竹

大なり

とろくもくろく 一  
まゆしあつちり 大屋  
しりりりりりり 知  
今様とてぬいり 風  
おのりりりり ち  
おのりりりり ち



ひやう

ひやうんやちうきくつ新し 万有  
まふりりひや新し 大至

柿町の噂いまよふ年の餅 仙臺 桃調

ひやうきくちうきくち市の人々 風を  
まふりりや年の尾程へ便り たま

仙臺様よ

はるさすきくち

雲路

西のけきししあへきくち 芭蕉

みんこりきくち新し

入おら山よこへゆるやま 以玉

陽きやひきくち 陽き



五月や青砂のまゝに 鹿乃亂 日田 繼宗  
菴室より 煙りや 日田 渭白  
ふふなるまゝに 萬の 日田 朱抱  
い雪のれりてや 日田 北人  
宿るゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 日田 元灌  
ふーてし 百目わたり 日田 温故  
めきききききききききき 日田 呂風  
名月や 日田 花人

名月乃 日田 白や 日田 山乃と 日田 井ね  
一 日田 水札  
種 日田 曲風  
晴 日田 墨  
飯 日田 呼丁  
初 日田 路健  
扶 日田 野  
新 日田 里



ちろちと肥ふふや風の度美濃守助童サマ

ひあやぬはつくと  
芝角

一重 馬の陰 頸水

鳥飛た大つまつ雲野に眠山

阿の叔おぬひ切ふる作の雪助産

本  
子  
物  
り  
て  
や  
と  
物  
う  
な  
す  
ふ

以  
 一  
 や  
 もの  
 毎  
 中  
 を  
 れ  
 く  
 分  
 月  
 砂  
 山

長崎より来、去来子書中

小倉 一七九

ちよとふとそやあとの舟定置り

多ハ漁夫乃女舟躍ハ毎之なり

七  
八  
黑  
崎  
沙  
剛

うらたふよ 田舎付顔や浦の宿

長生多壽

足一令ハ孫子也 墓あり

内取詠方大明神みすう

貴きもなりくおとそこの月



田上りよふふふふ  
 心あふし魚喰ふふふ早稲の飯  
 是ハ漁村乃ふふ路し  
 櫛乃ふふふふふふふふふ  
 田上乃る月  
 乃月やふふふふふふふ  
 太ふふふふふふふふふ

八月廿四

風ふふ

ふふふ



元禄十一戊寅年

十一月吉日

京寺町二條上ノ所

井筒屋庄兵衛板



